

多くの市民が職場を得た メチアル首相が感謝の辞

ヨーロッパで三番目の生産拠点 YD Sが開所式

5月21日、湿度が低いなか、日本の秋を思わせる五月晴れのなかで、メチアル首相を主催し、矢崎デブナル・スロバキア有線会社（YD S）石川雅之社長（YD S）式典と懇親会の二部形式で行われた。

特に懇親会は、ヨーロッパ文化を代表するハブスブル家マリア・テレジアで有名なシェーンブルク宮殿やワネットのフランス・ベル



石川(YD S)社長

サイユ宮殿のごとき豪華・華麗ではないが、形式は同じく、当時の地方諸侯・貴族の居城はかくあつたかと思わせる。質素な作りのボイニツェ城で行われた開所式の二、三日前までは、寒さを感じる雨天が続いたが、準備を始めた開所式の前日から、カラッと晴れ上がったこと、YD Sの将来を暗示しているようであった。

【開所式式典】

金持ちから金を巻き上げ貧しい人に分け与えるという、ロビンフットに似た物語をテーマにした、民族舞踊などを交えながら、メチアル首相の米場を持ち、式典が開かれた。

最初に、矢崎グループを代表して挨拶に立った矢崎副社長は、スロバキア政府



ロビンフットに似た物語をテーマにした、義賊の民族舞踊

の多大な協力のおかげで、今日、ヨーロッパで三番目の生産拠点を、YD Sの開所式を迎えることができたとお礼を述べると共に、一九八八年の「プラハの春」と世界的に有名なクリスタルのカットグラス（ボヘミアガラス）を例にあげ、「力気と知性を備え、精密な仕事を集中力と忍耐力でやり遂げる。スロバキアの皆さん、競争できるワイヤーハーネスを作っていただけのもので、確信している。」「そのために、タイムラーとクライスラーの合併に象徴される、自動車業界再編の激動を勝ち抜かなければならず、それを勝ち抜く鍵は

世界最高の品質・コスト・納期を達成する以外、道はない」と挨拶した。

矢崎副社長は、「一九九三年にチエコから分離し、政治的に独立したが、経済的独立は、困難な状況にあった」と、そのような折り、矢崎の話があり、是が非でも誘致したいと考えていた」と、当時を振り返った。

そして、スロバキアに日本企業として最初に矢崎が進出したおかげで、他の日本企業も進出するようになり、多くの市民が職場を得、社会的に新しい段階に入ることができた」と、感謝の辞を述べた。

また、スロバキアは社会的インフラが備わっている



ので、「ここに限りなくダイナミックに活動し、発展することを期待し、そのためには、政府として出来得る限りの努力をする」と、約束した。

矢崎デブナル・スロバキア有線会社を代表して石川社長は、「美しき青きドナウ」と、ドナウ越しに見

えるブラチスラバ城を引用し、初めて、スロバキアに來たときの感慨を述べながら、「矢崎デブナル・スロバキアの品質が、世界最高だとの評価を受けることを目指し、スロバキアの人々と共に努力することを誓った」と挨拶した。

その後、石博（日本大使館）参事官とデブナル氏それぞれ挨拶し、テープカットと工場見学が行われた。

【記者会見】
正面入り口に菩提樹（スロバキア国木）を植樹後、約四〇〇名のスロバキア人記者および日本経済新聞記者を招き、記者会見を行った。

質問は、メチアル首相と矢崎副社長に集中した。メチアル首相には、スロバキアにおける企業誘致の現状と見通し、矢崎副社長にはスロバキア国産品の使用の可能性、欧州フォード以外のメーカーへの納入予定、E U通貨統合の影響、アジア通貨下落の影響などの

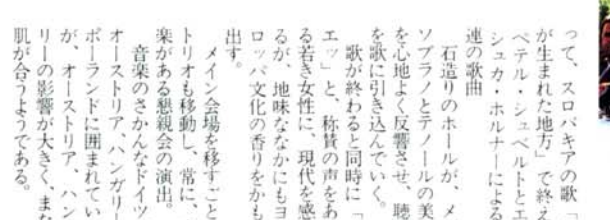
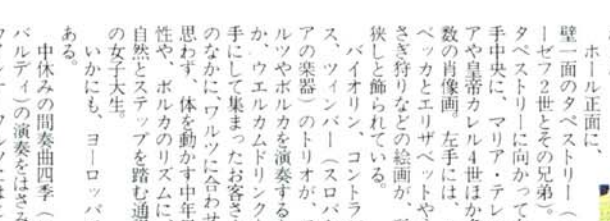
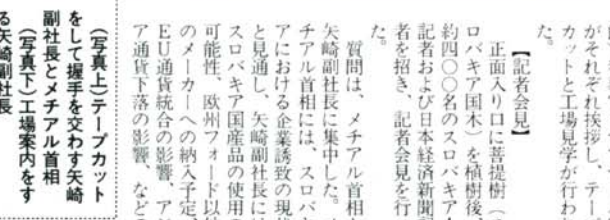
【懇親会】
式典後、場所をボイニツェ城に移して、懇親会が行われた。

メイン会場は、ハンガリー王国フィヤデー王の名を冠したフィヤデーホール。

ホール正面に、壁一面のタベストリー（ヨセフ二世とその兄弟。タベストリーに向かつて右手中央に、マリア・テレジアや皇帝カレル4世は多数の肖像画。左手には、レベッカとエリザベットやうさぎ狩りなどの絵画が、所狭しと飾られている。

バイオリン、コントラバス、ツインパー（スロバキアの楽器）のトリオが、ワルツやホルカを演奏するなか、ウエルカムドリンクを手にして集まったおさまのなかに、ワルツに合わせ、思わず、体を動かす中年男性や、ホルカのリズムに、自然とステップを踏む通訳の女子大生。

いかにも、ヨーロッパである。中休みの間奏曲四季（ヒバルティ）の演奏をはじめ、ワインナーワルツにはじま



（写真上）テープカットをして握手を交わす矢崎副社長とメチアル首相（写真下）工場案内をする矢崎副社長

矢崎グループ代表で式典に臨む矢崎副社長夫妻